

ここ数日、めっきり寒くなってきました。そろそろ薪ストーブに火をいれなければならないと思うものの、煙突を掃除してからじゃないと火を点けられないので、今月の精米・発送が終わるまでは・・・と厚着をして我慢している数日です。今年も残すところあと1か月ちょっととなりましたね。あっという間の1年と言いたいたところですが、O2ファームでは1日に3日分くらいの出来事が起きるので、1年なのに3年分くらい経っている気がします。今月も非常に盛りだくさんでした！



まずは恒例のこづみカフェ。今年で4回目になるイベントで、稲刈り後の田んぼを開放するオープンカフェイベントです。今年は土曜～火曜日の4日間で実施しました。イベントの目的は、①お年寄りの技や知恵を受け継ぐ、②都会からくる人たちに稲刈り後の田んぼに入ってもらって生産現場を身近に感じたり農村の景色を堪能してもらう、③自分たちが楽しむ、の3つ。今年は県が「里モンプロジェクト」と名付けた農村振興事業から予算を頂いたので、例年より豪華なイベントになりました。

このイベントはオープン前から始まります。それは、技の伝承。「こづみ」というのは、稲わらを舂まで保存しておく技のことで、稲刈り後の田んぼに並んでいる小人の家のようなアレのことです。見たことのある方ももちろんいらっしゃるのではないのでしょうか。最近ではほとんど見かけることができなくなりました。機械でロールにする方がずっとラクなので仕方ないことですが、秋の風物詩とも言えるあの風景を是非とも残したい、と思ったことがそもそもの始まりでした。近所のお年寄りから、こづみの作り方を教えてもらうようになって4年目。1年に1度しかチャンスがないためか、なかなか上手くなりません。今年は特に、稲わらの乾燥が甘く、うまく積むことができました。「来年は、乾燥の仕方から教えないとな」と90歳近いおじいさん。お年寄りたちがこんな風に「教えてやる」という意欲を見せてくれたことがとっても嬉しかったです。今年は、カフェの開催期間中も毎日のように竹細工の材料を持ったお爺さんが来てくれて、私たちやカフェに来たお客さんに教えてくださいました。カフェ期間中は幼稚園を「自主休園」していた讚太郎は、6歳にして竹とんぼの作り方を覚えました。



週末にはプロのミュージシャンをお呼びして青空ライブ。初日はモンゴル民謡の、2日目はギターとボーカルの2人組のライブをしました。初日は天候に恵まれ、抜けるような青空の下で、信じられないほど遠くまで響く「モンゴル民謡」を楽しみました。2日目のライブは残念ながら曇天でしたが、Johnson & JohnsonのCMソングも手掛けているご活躍中のお二人が田んぼで熱唱。とっても贅沢なひとときでした。週末は県外からのお客さんもいらして下さり、子供は自由に泥遊び、大人は淹れたてのコーヒーと軽食で音楽にも触れる、という夢のような空間となりました。県からの補助がなければ、人件費分が赤字のイベントなのですが、皆さんに喜んでもらったので「やって良かった」と思える今年のこづみカフェでした。



イベントの間中は「農業・農村暮らしを体験したい」という立教大の学生さんも来ていました。彼は、「他のみんながやっているから」という理由で就職活動をする気になれず、自分が何をしたいかを真剣に考えた時に、一次産業への興味が湧いたとのこと。農学部でもないし、親戚に農家がいるわけでもない、ということで、とりあえず体験にやってきたそうです。イベントや農作業を通じて、農村の楽しさや可能性を感じてくれたと思います。

一方、私と耕太の夢は、普通の大学を出た若者の選択肢にも「農業」が入ること。仕事となれば大変なことだってあるのはどんな職種でも一緒です。それなら、作る喜びや四季を感じられる農業は、選択肢の一つとして大いにアリだと思っています。まだそれが「当たり前」という状況には程遠いですが、最近二十代前半の若者が次々と我が家を訪れていて、関心の高さを感じています。来春卒業予定の彼がどんな道を選ぶか、楽しみにしていきたいと思っています。

イベントが終わってホッとする間もなく、私エリは北海道へ。ドイツから専門家が来るとのこと、その通訳としてご指名を受けたのです。いやあ、遠かった…。訪れたのは、北海道で一番小さな村、音威子府（おといねっぶ）村。酪農家がどんどん離農しているとのこと、このまま放っておいたら牧草を植えていた畑が荒れ放題になってしまう！という危機感を抱いた村長さんが、牧草から電気や熱をつくればいいんだ！と閃いたとのこと。このアイデアが実現されれば、阿蘇にとっても大きなヒントになります。就農以来、南阿蘇でそういう事業ができればいいなと夢見てきましたが、国内第一号は北海道になるかもしれません。それでもいい。「できるんだ」という姿を見せてもらえたら、きっと阿蘇も勢いがつくかもしれないと思いました。できる限りの応援をしていきたいと思っています。



その音威子府村。人口は800人強しかいないのですが、なんと村立高校があるとのことでご案内して頂きました。美術と工芸の高校だということでさらにびっくり。1年生はノコギリやカンナの使い方や手入れの仕方から習い、2年生では小さな家具を製作。そして3年生は卒業制作として、「実家に置くための家具」をデザインから手掛けるそうです。木材だけじゃなく、ガラス板や金属も含めた材料の全ては村が調達。最近よく若者に会いますが、「選択肢の中から選ぶ」ことはできても、「自分で選択肢を増やす」ことを苦手とする彼らの多くに対して少し不安を感じていた私にとって、音威子府の高校生たちはデザインや材料を決めるところから、「自分の思い」を形にしようとしている姿に胸を打たれました。小さいからこそできることがある。息子たちが通う学校を見ていると同じことを思います。北海道で一番小さな村から、大きな夢をもった子たちが世界に羽ばたいていく。素晴らしいものを見せて頂きました。



そろそろ農閑期。「百姓」なので秋でも冬でもやることはいくらでもあります、おかげさまで今年も無事に収穫することができたので、稲刈りもワラ集めもイベントも終わって、気持ちに少しゆとりが持てるようになったのが何より幸せです。師匠も走る師走に入りますが、どうぞ皆さま、お体にはくれぐれもお気を付けてください。